

変貌する ラテンアメリカのファミリービジネス ——あとを追う研究——

星野 妙子

●1980年代のラテンアメリカ企業研究

1970年代、日本では従属論が一世を風靡し、ラテンアメリカの低開発を先進国による収奪の結果ととらえる見方が広まった。そこでは地場の企業は、従属状況に受け身に対応する脆弱な存在として描かれていた。はたして受け身と言い切れるほどラテンアメリカの企業研究は進んでいるのだろうか。それが当時大学院生だった筆者の頭に浮かんだ疑問である。そんな経緯もあって、1980年代初頭に入所したアジ研で、筆者がまず研究対象に選んだのが、ラテンアメリカの企業だった。フィールドとしたのはラテンアメリカでは比較的研究が進むメキシコ。分析視角として戦前期日本の財閥研究を参考にした。

当初の予想どおり、メキシコや米国において研究蓄積は乏しかった。特に今日のファミリービジネス研究に連なる、企業を所有・経営支配するファミリーに注目した研究は、文化人類学や歴史学の事例研究に限定されていた。研究蓄積が乏しかった要因として2つの点を指摘できる。第1に資料入手の困難である。ファミリービジネスの株式上場が進むのは1980年代後半以降であり、非上場企業の一次資料は手間暇かけなければ入手が難しかった。第2に、経済における地場企業の存在感が小さかったために、研究対象として認知されていなかったことがある。しかしそのような状況が1980年代に変化し始める。

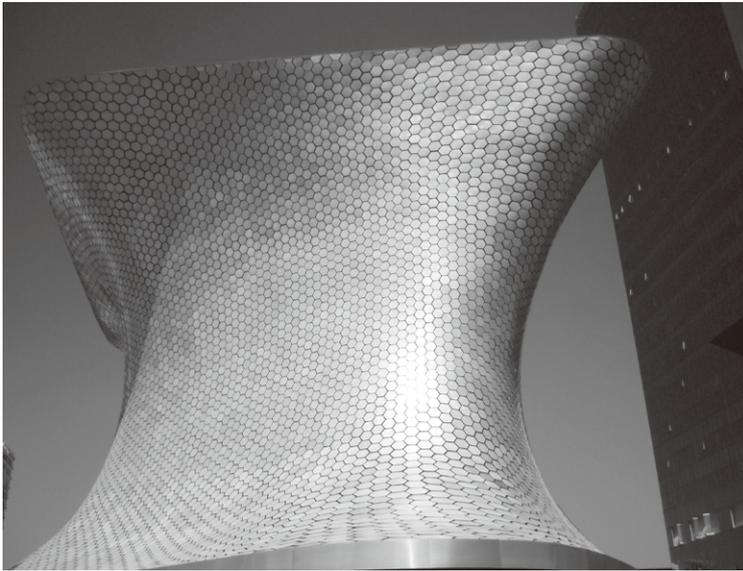
●ラテンアメリカのファミリービジネスの淘汰と再生

1980年代以降ラテンアメリカは、1982年の対外債務危機を皮切りに、度重なる経済危機に見舞われた。ファミリービジネスにとっては試練の時代であったが、注目されるのは、その過程において巨大化し、多国籍企業化するファミリービジネスが出現したことである。

その背景には、対外債務危機以降のラテンアメリカ各国で、経済立て直しのために新自由主義経済改革が実施されたことがある。貿易と資本の自由化により競争が激化したことでファミリービジネスの淘汰が進む一方、生き残ったファミリービジネスや新興のファミリービジネスは、経済構造の転換や経済グローバル化が生み出すビジネスチャンスをつかんで、国内外で事業を拡大していった。

●経済グローバル化とビジネスグループ研究の興隆

経済アクターとしてのファミリービジネスの台頭は、ラテンアメリカのみならず、1980年代末以降、世界各国でみられた現象であった。その背景に金融のグローバル化、世界的な資本流動性の増加がある。国際金融市場での資金調達が可能となったことで、ファミリービジネスの長年の成長制約要因であった資金制約を克服する道が開けたのである。このような変化は、ファミリービジネスの研究環境にも変化をもたらした。第1に資料へのアクセスが改善されたことである。国際金融市場での資金調達のために、ファミリービジネスが情報開示を始めたのである。メキシコを例に挙げれば、コーポレートガバナンス改革の一環として、2002年7月から上場企業の有価証券報告書がメキシコ証券取引所ホームページで閲覧できるようになった。第2に、ファミリービジネスが経済アクターとして重要性を増し、研究対象として認知されるようになったことがある。研究環境の変化にともない、1990年代後半から画期的な研究が次々と現れた。欧米の経営史学で大きな影響力をもつ、チャンドラーやバル＝ミーンズの近代産業企業における所有と経営の分離命題に反証を突き付けたのは、ラポルタらであった。彼らは世界の大企業において、家族支配企業が経営者支配企業以上に一般的な存在であることを明らかにした（参考文



ラテンアメリカのファミリービジネスは財団活動に熱心だ。
カルロス・スリム財団が運営するソウマヤ美術館
(メキシコシティにて筆者撮影)

献①)。カンナとヤフェは「お手本？あるいは厄介者？」という刺激的なタイトルで、研究サーベイをもとに発展途上国のビジネスグループの多様性を明らかにした。発展途上国のビジネスグループの多くは、家族が所有経営支配するファミリービジネスである。彼らはビジネスグループの形成、存続、進化を途上国の制度環境への適応と捉え、国、時期、グループ個別の事情により、未発展な制度を補完するお手本となることも、レントシーキングや独占力によって厄介者となることもあると説いた（参考文献②）。発展途上国のビジネスグループ研究の集大成としては、チョルバンらが編集したハンドブックを挙げることができる。同書は発展途上国のビジネスグループを国別に分析した国別編と、ビジネスグループに共通する特徴を理論的に分析した理論編の2部から構成され、1990年代から2000年代に興隆したビジネスグループ研究の主要な論点を網羅したものだ（参考文献③）。

●ラテンアメリカのファミリービジネス研究にむけたスペイン発の新しい動き

1990年代、2000年代のビジネスグループ研究を主導したのは、主に先進国の経済学者、経営学者、法学者だった。ラテンアメリカに関する研究であっても、ラテンアメリカで研究する研究者によるものは意外と少ない。あったとしても公開資料を用いた経営学者による紋切り型の経営分析が多い。つまり、ファミリービ

ジネスの族生地でありながら、ラテンアメリカは2000年代までのファミリービジネス研究の世界的潮流から外れていたといえる。そのような状況に、2010年代に変化のきざしが現れた。歴史学の研究者によるラテンアメリカ規模でのファミリービジネス研究の連携の動きである。連携の旗振り役となったのは、経営史学を専門とするスペインとアルゼンチンの研究者である。11カ国22人のスペインとラテンアメリカの歴史学の研究者が参加したプロジェクトの成果は、2015年に出版されている（参考文献④）。プロジェクトを資金面で支援したのは、スペインのBBVA銀行の財団であった。旧宗主国による植民地支配の痕跡探しの作業のようにみえて興味深い。これまであまり知られてこなかったラテンアメリカ中小国にまでファミリービジネスの

実態解明を進めたという点で、このプロジェクトの意義は大きい。スペインとラテンアメリカのファミリービジネスに共通するイベロアメリカ的特質が析出できれば、世界のファミリービジネス研究への大きな貢献になると思われるが、残念ながらそこまでは至っていない。今後の研究の進展に期待したい。

(ほしの たえこ／アジア経済研究所 ラテンアメリカ研究グループ)

《参考文献》

- ① La Porta, Rafael, Florencio Lopez-de-Silanes and Andrei Shleifer, "Corporate Ownership around the World," *Journal of Finance*, Vol. 54, No.2, April 1999, pp.471-517.
- ② Khanna, Tarun and Yishay Yafeh, "Business Groups in Emerging Markets: Paragons or Parasites?" *Journal of Economic Literature*, Vol.45, No.2, June 2007, pp.331-372.
- ③ Colpan, Asli M., Takashi Hikino and James R. Lincoln, *The Oxford Handbook of Business Groups*, New York: Oxford University Press, 2010.
- ④ Fernández Pérez, Paloma, Andrea Lluch eds., *Familias empresarias y grandes empresas familiares en América Latina y España una visión de largo plazo*, Bilbao: Fundación BBVA, 2015.